

# 地域のあす デザインしたい

いま No.410  
子どもたちは  
森の学校 8

ったことのある『bet』は競馬かな」と、日本語でヒントを出した。長谷川さんはすかさず、「賭けごと!」。

「正解!」。3人のやり取りはテンポよく進む。何しろ、教室にはこの3人しかいない。

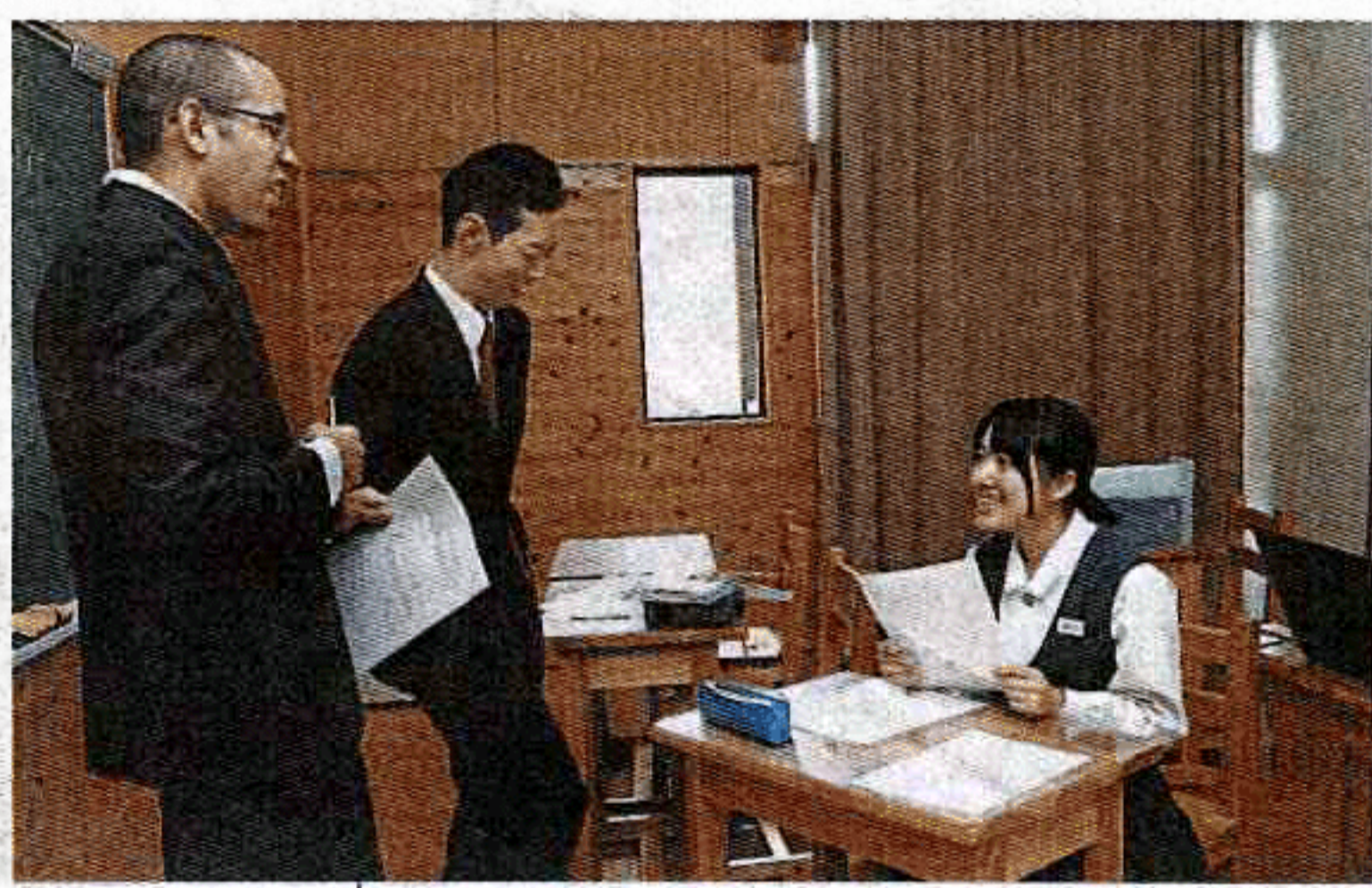
宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校6年(高校3年)で、私立文系の大学をめざす生徒向けの英語の授業。今年度の6年生37人のうち、私文カリキュラムを履修したのは、長谷川さん1人だった。

ただ。

ほかに、国語、数学、化学など全部で9コマの選択授業を1人で受けている。「最初は不安だったけど、私に合わせて授業をしてもらえりし、質問もしやすいので満足しています」

実はすでに推薦入試で京都造形芸術大(京都市)への進学を決めている。頑張り屋さんだから、今も授業はもちろん、寮の夜の学習や、受験本番を控えた6年女子有志が早朝5時に始め

る勉強会にも参加している。でも、気持ちは将来に向けて



いる。進学先で、コミュニティデザイナーの山崎亮教授に会うのを心から楽しみにしている。山崎教授は、全国各地で過疎化や中心市街地の空洞化など、地域の課題と向き合い、その解決に取り組んでいる。

長谷川さんは2年前、体験学習で戦後の農村の生活について調べていたとき、五ヶ瀬町や近隣村の高齢者と話す機会があった。あるおばあさんが「子ども

たちが町を出ていってしまおう。食い止めたけれど、都会に出なければ高校もない」と嘆いていた。過疎化を肌で感じた。

その問題に関心を持つうち、山崎さんのことを知った。もともと絵を描くのが好きだった長谷川さんは「デザインの力を生かして、私も地域の課題解決の役に立ちたい」と、山崎さんのいる大学への進学を決めた。

自分に何ができるのか、まだ分からない。でも、大学でヒントをつかみ、何とか具体的な実践につなげたいと思っている。

たった1人で英語の授業を受ける長谷川映見さん(右) 〓宮崎県五ヶ瀬町

(齊藤純江)

「『bet』の意味は?」  
外国語指導助手のマルコスさんに英語で聞かれ、長谷川映見さん(18)は首を横に振った。

立塚揮之教諭(34)が「僕がや